与謝野寛詩歌集

鴉と雨抄評釈

逸見久美著

明治書院

与謝野寛詩歌集

鴉と雨抄評釈

逸見久美著

明 治 書 院

著者略歴

逸見久美（いつみ　くみ）

青山学院女子専門部国文科卒業

早稲田大学文学部国文科卒業

早稲田大学大学院修了（旧制）

実践女子大学日本文学研究科博士課程修了（新制）

文学博士号を取得す（昭和52年3月『評伝与謝野鉄幹晶子』による）

現　　在　聖徳大学教授、青山学院女子短大講師

著　　書　『評伝与謝野鉄幹晶子』『みだれ髪全釈』
『むらさき全釈』『小扇全釈』
『わが父翁久允』『女ひと筋の道』

編　　書　『与謝野晶子全集』二十巻
『与謝野寛晶子書簡集』（天眠文庫蔵）（植田安也子共編）

与謝野寛詩歌集
『鴉と雨』抄 評釈　　定価4800円（本体4660円）

平成四年九月二五日　初版印刷
平成四年九月三〇日　初版発行

著者　逸見久美

発行者　東京都千代田区神田錦町一ノ一六
株式会社　明治書院
代表者　三樹彰

印刷者　精文堂印刷株式会社
代表者　西村弥満治

発行所　東京都千代田区神田錦町一ノ一六
株式会社　明治書院
電話　東京(三二九二)三七四一(代)
振替口座　東京三―四九九一番

© Kumi Itsumi 1992.　ISBN4-625-46047-6

凡例

一、本書は、与謝野寛の第八詩歌集『鴉と雨』（大正四年八月一日、新詩社刊）の初版本を底本とし、短歌三百九十首、詩十一篇を抄出し、それに評釈を施したものである。「与謝野寛詩歌集『鴉と雨』」についての解説は本文篇の前に配した。

一、評釈に当たって、詩と歌を初出年代順に配し、初出不明の詩と歌をその後に配した。

一、標題歌の頭に付した（　）内の数字は『鴉と雨』の抄出歌の制作年代順の番号であり、これは本書の掲載の通し番号である。このことは付篇においても同様である。

一、標題詩歌は五号活字を使用し、字体は著しい差異のないものを除いて、可能な限り、初版本と同様な正字活字及び初版本に用いられている活字（欲・灯・涼など）を使用することに努めた。また、原文通りにルビを付した。但し、引用の歌の場合は原則として新字を用い、ルビも省いた。

一、標題詩歌の出典欄に〔初出〕を明示し、初版詩歌との異同を示した。初版本は詩と歌のすべてにルビが付されており、〔初出〕にルビのないものの異同を示した。その際、標題詩に付した（　）内の漢数字の部分の異同は詩の下に付した。標題歌の〔初出〕には歌の句番号を（　）内の数字で示し、その異同も明らかにした。また、活字も可能な限り正字活字を用いた。

一、歌には一首ごとに〔訳〕〔評〕を、また便宜上〔語釈〕も付した。詩には一篇ごとに〔評解〕を付した。

一、題名の下の（　）内に記されてある年号、例えば「（一九一〇年）」とあるのは、その作品の制作年代、つまり初出の年代は与謝野寛が記したものであり、一応その順に配列した。しかしこれらの中にはいくつか誤植があり、それは本書の「解説―与謝野寛詩歌集『鴉と雨』」の「二『鴉と雨』について」「(2)体裁上の問題点」に於て訂正しておいた。

与謝野寛詩歌集

『鴉と雨』抄評釈　目　次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

凡例　4
解説――与謝野寛詩歌集『鴉と雨』　1
『鴉と雨』抄　35
本文篇　35
明治四十二年初出　37
明治四十三年一月初出　39
明治四十三年五月初出　41
明治四十三年七月初出　42
明治四十三年八月初出　45
明治四十三年十月初出　48
明治四十三年十一月初出　86

明治四十三年十二月初出 127
明治四十四年一月初出 137
明治四十四年二月初出 151
明治四十四年四月初出 171
明治四十四年八月初出 175
明治四十四年十月初出 177
初出不明 187

付篇 261
『鴉と雨』抄 掲載歌一覧 263
各句索引 289
あとがき 313

解　説——与謝野寛詩歌集『鴉と雨』

一　与謝野寛の半生—渡欧まで—

与謝野寛は本名、号鉄幹は明治二十三年から三十八年まで使われその間、鉄幹の名を使用する。明治六年二月二十六日、京都市外岡崎村の西本願寺支院願成寺住職与謝野礼厳の四男として出生。名付親は太田垣蓮月、母初枝、兄は正麿（和田大円）、龍麿（赤松照幢）、厳、弟は修、妹は静。明治十二年（七歳）の時、父の事業上の失敗により寺を追われ、十三年、父は布教師となり一家は鹿児島で過ごし、十五年再び京都へ戻った。その年十二月、鉄幹は貧困のため京都の発願寺の養子となったが二か月後、そこを飛び出す。さらに十六年六月には大阪住吉の安養寺の養子となり、三年後にはそこも脱出。この間、漢詩専門雑誌「海内詩媒」（明17—22）には澄軒逸史、墨仙々史の名で作品を発表し、漢詩の素読や習字を近隣の人々に教え、神童と呼ばれたという。十九年、岡山の安住院へ養子にいった長兄和田大円の許へ行き岡山中学を受けたが失敗し、また父母のいる京都へ戻った。この頃、『万葉集』に熱中するほか、古典文学や翻訳書に親しみ、英語を独習する。三兄厳は父との折り合いが悪くて失踪。長兄・次兄はそれぞれ養子となっていたので、父は鉄幹を後継にすべく得度させ礼譲と号した。二十二年、次兄赤松照幢の養子先の徳応寺（山口県徳山）へ父は鉄幹を修行に出したが、父の意に添わず、徳山女学校の国漢教師となり、「山口県積善会誌」の編集も兼ねた。当時、新文学の傾向にあった落合直文や森鷗外の文章にも心を寄せた。

間もなく徳山女学校の教え子浅田信との恋愛が表面化して二十五年には徳山を追われた。一時、京都の父母の許に帰ったが、初秋には上京して直文の門下となる。この年の十二月、一号限りだったが、文芸誌「鳳雛」を刊行。

二十六年、直文の弟鮎貝槐園と共に直文を助けて新派和歌の結社浅香社をおこす。二十五、六年頃「婦女雑誌」に万葉調の長短歌や歌論を発表した。二十七年には「二六新報」（5月10―18日）に歌論「亡国の音」を連載し、古今集を祖とする桂園一派の旧派歌人らの歌を誹謗し、丈夫ぶりを提唱した。二十八年から三十二年前半まで四回渡韓している。二回目から三回目の間に第一詩歌集『東西南北』（明29・7）第二詩歌集『天地玄黄』（明30・1）を刊行し、新派歌人としての地位を得た。二十九年九月に鉄幹は、直文ら十一人で新詩会（新体詩会）も起こした。三十年三月、合同詩集『この花』を刊行し、ここに長編詩「郡守舘」を載せ、渡韓の体験を描いた。「中学新誌」「反省雑誌」「読売新聞」などにも俗語や普通語を詩に採り入れるべき、という新しい見解を示した。

三十一年四月十日の「読売」に、「草餅集」と題する十五首を発表したが、このうち

春あさき道潅山の一つ茶屋に餅食ふ書生袴つけたり

という一首が、後に妻になる鳳晶子の眼に止まり、晶子に新しい傾向の歌としての印象を強くさせた。八月十七日、父礼厳は次兄赤松照幢の徳応寺で没す。

三十二年、正月を京城で迎えるが、これが四回目の渡韓であった。帰国後の夏、さまざまな懊悩を抱えて嵯峨の天竜寺で参禅す。八月六日、浅田信の間に女児ふき子が誕生するが、一月余で病没、協議離婚となる。十月、同じく徳山女学校の教え子林滝野を伴って上京し同棲、十一月三日に新派和歌の結社新詩社をおこす。

三十三年四月、「明星」を新詩社から創刊。初号から五号までは林滝野の名義で新聞型の体裁であった。晶子は二号から歌を発表する。六号から与謝野鉄幹（寛）の名義となり、菊版型の雑誌となる。鉄幹は「明星」の宣伝普及を兼ねて八月四日に西下し、半月滞在。その間晶子、山川登美子、そして同人らと親交を深めた。これを発端にして浜寺の歌会、住の江散策などの三人の作品は「明星」や「よしあし草」を賑わせた。九月二十三日、滝野との間に長男萃誕生。十月二十七日から徳山にある妻林滝野の実家へ出向き、滝野母子を与謝野家へ入籍させてほしい

旨を申し出たが、林家へ鉄幹が養子に入る約束であったことを口実に話が決裂し、林家は鉄幹に離縁を言い渡した。傷心の鉄幹は帰途、岡山、大阪に回り同人たちに会い、そのあと十一月五日、晶子、登美子を誘って京都の永観堂で紅葉を鑑賞し、そのまま三人は粟田山で一泊。その折の三者の思いが「明星」八号（11月）に作品化されて発表。このとき鉄幹は妻との離縁、登美子は親の奨める結婚を決意したことを語り、これまでの鉄幹を囲む晶子、登美子という構図が変化することを各々確認した。ところが、一条成美の模写によるフランスの裸体画を載せたことで、「明星」八号は発売禁止となった。

明けて三十四年の一月九、十日、鉄幹と晶子は前年の秋、三人で泊まった粟田山で再会し、二泊する。

みだれ髪を京の島田にかへし朝ふしてゐませの君ゆりおこす（初出―（埋草）「明星」明34・5）

君さらば粟田の春のふた夜妻またの世までは忘れゐたまへ（初出―書簡）

春寒のふた日を京の山ごもり梅にふさはぬわが髪の乱れ（初出―緋桜「星光」明34・3）

晶子はこのように詠んで鉄幹との恋愛を率直に表現している。右の三首はいずれも『みだれ髪』に採された。二首目は、実は鉄幹にあてた晶子書簡（明34・2・2）に書かれた歌で『みだれ髪』では、二、三句が「巫山の春のひと夜妻」と改作されている。この書簡を含む双方の五通ずつが第二次世界大戦後に公開された。これらによって二人が粟田山で再会したことが明らかになり、鉄幹の『鉄幹子』（明34・3）『紫』（明34・4）、晶子の『みだれ髪』（明34・8）の歌が実体験に基づいたものであったことが理解されたのである。この年「明星」の二、四、六月は休刊。二月二十七日の新聞「日本」で正岡子規が「明星」廃刊の誤報を流したが、三月一日の同紙でそれを訂正している。次いで十日後の三月十日「悪徳鉄幹」と名指しにして十七の罪状を掲げた『文壇照魔鏡』は匿名の刊行だったが、実際の筆者は高須梅渓、田口掬汀である。これは鉄幹の人権を無視し、プライドを甚だしく傷つける怪文書であり、明らかに鉄幹を文壇から失墜させる目的をもって書かれたものであった。名誉毀損で鉄幹側は裁判に持

ち込んだが、証拠不十分のため結局は敗訴となった。このためか、四月の「明星」は休刊となった。この事件の直後、前記の第三・四詩歌集『鉄幹子』、『紫』が出版された。一方、徳山へ帰っていた滝野母子が五月十六日再度上京し、六月上旬には帰郷する。これと入れ違いのようにして六月十四日、晶子は上京し鉄幹と同棲する。一時晶子上京により波紋も起こったが、すべてを克服して二人はこの年の夏、結婚する。

三十五年、前年末から正月にかけて鉄幹、晶子は大阪に向かい、二日の文学同好会の新年会に鉄幹のみ出席。晶子は堺の実家へ。帰途、二人は近畿地方を旅する。この年の一月の「明星」から晶子は「与謝野晶子」の署名となる。「明星」の赤字防止のために文芸誌「片袖」「少詩人」を刊行したが、いずれも二、三号で廃刊。また「韻文朗読会」を八月、十月と開催したが、十月の時には七十五名の予定が九百名になり盛会であった。しかしこれは一過性のもので終わった。この年には様々な企画を試み、この他「明星マッチ」「みだれ髪かるた」「明星絵ハガキ」などもあったが、ほとんど失敗であった。この他には新詩社の歌を無断転用した『くさぶえ』(明34刊)、『新派和歌事典』(明35刊)に対して寛は「明星」誌上で抗議している。また尾上柴舟(さいしゅう)、金子薫園(くんえん)の歌集『叙景詩』(1月)の序文で「明星」の歌を暗示的に批判中傷したことに対しても厳しく反論し、新詩社の立場を「明星」に明示し、『叙景詩』一派と対立した。この他、鉄幹、晶子についての中傷の書として『公開状』(3月)、坂井久良岐の『文壇笑魔経』(5月)、鉄幹、晶子を素材とした田口掬汀の小説『魔詩人』(10月)もあった。十一月一日、上田敏の命名による長男光誕生。六月には『新派和歌大要』、十二月には第五詩歌集『うもれ木』刊行(文章も含む)。

三十六年には、前年の多方面にわたる企画の失敗を反省したものか、作品製作に専念するようになった。折しも時局は日露戦争の前年であり、詩壇は国詩的傾向にあったためか、長編叙事詩「源九郎義経」を十二回掲載の予定であった。この企画に加わったのは鉄幹の他に前田林外、平木白星であったが、感情問題がこじれて九回で中断してしまった。五月、鉄幹、晶子は同人らと京都、高野山、和歌の浦へゆき、晶子は実家へ寄る。九月から「一夜百

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

首会」が新詩社で行われるようになった。これは後まで新詩社の恒例として続くことになる。十二月十六日、恩師落合直文没す。

三十七年四月、同人らと近畿地方を旅する。同月、未亡人となった同人山川登美子そして増田雅子は日本女子大学へ入学のために上京する。五月、晶子と合同詩歌集『毒草』（第六詩歌集）刊行。これは戦時下にありながら文芸性が高い。同月、渋谷村中渋谷三四一へ転居。六月二十二日、次男秀出生（薄田泣菫の命名）。八月、同人らと赤城山の諸勝を歴訪す。九月、晶子の詩「君死にたまふことなかれ」が発表され、これは翌年にかけて物議を醸し出す。この詩を批判した大町桂月、擁護した劍南（角田浩々歌客のこと）の間で応酬が繰り返され、晶子は桂月に「ひらきぶみ」（11月）をもって抗した。しかし桂月は「乱臣、賊子」と誹謗したことで、鉄幹は「無責任な口吻」だといって激怒した。その後もこの詩についていろいろと論議されたが、戦時下であったためか、批判の声の方が高かった。十一月三日、渋谷の千駄ケ谷へ移転。

三十八年も戦時下であった。一月、晶子は詩歌集『恋ごろも』（登美子・雅子合同）を刊行。この集に「君死に給ふことなかれ」が掲載されることが日本女子大学に洩れ、前年（明37）には、登美子と雅子はこのことで一か月の停学処分を受けた。四月、高村光太郎の戯曲「青年画家」が「明星」に載り、これが同月十五日、上演され鉄幹も出演した。この年の「明星」で最も大きな収穫となったのは、例えばボードレールやマラルメなど西欧象徴詩の翻訳が多数掲載されたことであった。当時、象徴詩人として著名だった上田敏や蒲原有明の詩が積極的に載せられたことも単に「明星」を賑わせたのみならず、日本詩壇の発展を促すものといってよいであろう。八月、寛、晶子は同人らと赤城山登遊。この年をもって鉄幹の号を名乗ることがなくなり、翌年からは本名寛を使うようになる。以後ごくたまに鉄幹の署名を使用することもあった。

三十九年一月号は、打って変わって仏教色の濃い誌面であった。晶子の妹志知里の夫である志知善友の「救世

言」を大々的に載せ、善友の出現を「聖人、神、如来」といって崇め奉ったのである。また同号に詩「永生」を載せ「善友仏」とまで祭り上げている。しかしこうした一種の宗教熱は一号限りで終わり、二号以降は善友について触れることはなかった。ところで晶子は『恋ごろも』に

鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな（初出「明星」明37・8(2)(3)銅にはあれど御仏は）

を発表しているが、この一首について先の大町桂月が「太陽」二月号（明38）で好意的な評を寄せているのに対し、伊藤左千夫は三十九年の「馬酔木」でこれを酷評した。左千夫の無理解ぶりに、寛は「明星」五月号で反撃を加えたのである。また一方で、新詩社の歌が三十五年で述べたように、女流歌集『白すみれ』（3月）と『新詩辞典』（5月）に無断転載された。これを寛は「不徳義」だと「猛省」を促し、謝告を新聞雑誌に載せろと迫った。その後八、九、十月の「明星」には、金子薫園の歌集『伶人』について寛の辛辣な批評「『伶人』を笑ふ」（上・中・下）が座談形式で掲載された。このようにいつも寛は外部との軋轢が絶えなかった。

四十年、三月には、長女八峰、次女七瀬の双子誕生。この年は「明星」が衰退期に向かいながらも最後の花を開いた年であった。三十八年頃から同人となった新進の北原白秋や吉井勇らは「競技製作」つまり競詠で、その才能を磨き合った。一時に華やぎを見せた「明星」では、その夏、白秋の出身地である九州の柳川を中心に長崎など一帯、南蛮趣味を求めて旅行することになった。一行は寛、白秋、勇、太田正雄、平野万里の五人。この旅行はそれぞれの才能を発揮させたが、やがて寛との隔絶を促す結果となった。その旅行記は二十三回にわたって「東京二六新聞」に掲載。六月十四日から、「閨秀文学会」が開催された。これは麹町の飯田町にある成美女学校内で、土、日曜を除いて毎日あって、女流文学者養成を目的としたものであった。女流の講師として晶子一人が選ばれた。寛は『万葉集』の講義を担当し、長短歌の添削も行った。ところで十一月号の「明星」には自然主義に関するさまざまな論が載せられた。しかし十二月号の「明星」で寛は自然主義小説を激しく非難した。

四十一年、一月には白秋、勇、正雄、長田秀雄、同幹雄、深井天川、秋庭俊彦ら七人が新詩社を脱退。この年は、実に多くの優れた文芸誌が廃刊となった。一月、伊藤左千夫主宰の「馬酔木」（明36・6創刊）が四年半で廃刊したが、二月「アカネ」に継承。三月、第一次「新思潮」は六号で、五月、河井酔茗主宰の「詩人」（明40・6創刊）が通巻十冊で、同月二十日には「日本平民新聞」がそれぞれ廃刊となった。時代は大きく変転を迎えつつあった。そして「明星」も十一月、百号をもって廃刊を迎えた。その中で「明星」が八年間生き永らえたことは注目してよいであろう。このころ一般的に寛より晶子の方が高く評価され、その人気が「明星」を支える一翼となっていた、と考えられる。

四十二年一月「スバル」は創刊され、新詩社脱退組の人々に啄木、万里、蕭々も加わった。寛は始めの頃、「スバル」に作品を発表していたが、しだいにその流れに追従できなくなった。寛は「スバル」よりむしろ「明星」の遺志を継ぐ雑誌をもちたいと思ったのであろうか、とりあえず五月に新詩社月報「トキハギ」を創刊した。この号には四月十五日になくなった山川登美子への挽歌として寛、晶子の二十首ずつが「哀歌」と題して載せられている。この頃から「自宅文学講演会」と称して二階の八畳間で十数人が集まり、寛は『万葉集』『枕草子』『日本上古史』、晶子は『源氏物語』や短歌選評などを受け持った。ここに集まった人々は二十名ほどだったが、その中に水上瀧太郎、堀口大学、大貫（岡本）かの子、三ケ島葭子らがいた。三月、三男麟出生。

四十三年五月、「トキハギ」は七集で終刊。「自宅文学講演会」は二月の三女佐保子出産の後、自然消滅となった。三十五年ごろから与謝野夫妻を物心ともに支援してきた「よしあし草」同人であった大阪の小林天眠（本名政治）というパトロン的存在の人物がいた。四十三年になって、すでに三十六年ごろから企画していた天眠中心の、理想的出版物を出す天佑社を設立しようという動きが具体的に起こった。それはその時点から百か月後、つまり大正七年を目指して資本金十万円を積み立てようとする企画であり、それに寛、晶子も加わっていた。この年には寛

の唯一の単独歌集『相聞』が三月に、第七詩歌集『橡の葉』が七月にそれぞれ刊行。これらには「明星」廃刊後の鬱々とした日々に詠まれた自虐的、自嘲的な作品がほぼ全編を占めていた。

四十四年の二月、四女宇智子出産（二度目の双子出産だったが一人は死亡）。陰鬱な毎日を過ごしている夫寛を見かねて晶子は渡欧を奨める。その資金作りのために晶子は五月頃から計画をたて奔走したが、その一例として屏風に自作の歌百首を書く「百首屏風」や他に半切幅物の購入者を募ることもあった。寛は渡欧に向けて語学に励み、大きな期待と共に妻に資金調達を負わせている屈折した思いも抱き、さまざまに心は動揺した。そうした「明星」廃刊後から渡欧直前までの、心の機微を詠んだのが『鴉と雨』であった。

二　『鴉と雨』について

1　体　裁

『鴉と雨』は与謝野寛の八冊目の詩歌集である（唯一の単独歌集『相聞』を除く）。大正四年八月一日、麹町区中六番町十番地、東京新詩社刊行。定価の記載はない。箱は横十三センチ、縦十九・八センチ、やや薄茶の地色。書名「鴉と雨」という文字は、箱右上の黒地の長方形（横十三センチ、縦十九・五センチ）内に赤色でデザイン化され、背には、「鴉と雨　寛著」とくずしの細字で書かれている。本書の表表紙は水色で、細い黒線囲みの内にデザイン化された「鴉と雨」という金細字が記され、本書の背も箱の背と同じくデザイン化された署名がある。扉絵は四色刷りで、西欧風の女性そして鴉や雲なども描かれ、その下に「La Sorciereau Corbeau」とあり、これはフランス語で「鴉に雨」の意、絵の右下に「中」と記されているのは、中沢弘光の筆である。晶子の『春泥集』の表紙にも「㊥」とあり、扉に「挿画中沢弘光氏」と記されていることにより、「中」を中沢弘光と想定した。扉絵の次

の内表紙には寛の筆跡で「鴉と雨　よさのひろし」と印刷されている。これまで署名はすべて漢字で書かれていたが、ヨーロッパから帰朝後は、詩歌に関わるものは、概ね平仮名の署名に変えている。本書もその一例である。

目次は本来本文の前に付されることが多いのだが、本書は巻末に配されている。

本書は四六判で、本文は二三三頁、歌は一頁に三首ずつあって一四一頁にわたり、全歌は四一一首で七章に分かれている。詩は九十二頁、十六篇である。

歌は「自らを嗤ふ歌」（二八八首）、「駱駝」（八首）、「萩之家先生の例祭に」（二十首）、「冬と飢」（十八首）、「塩原の秋」（二五首）、「砂」（十一首）、「灰の底より」（四十一首）、全歌四一一首中、初出判明歌は二三二首、そのうち三九〇首を本書に収めた。詩の方は「黒き声」「倦怠四篇」「正月」「応接間」「煙草」「星」「冬のうしろ姿」「春の鳥」「誠之助の死」「小曲七篇」「雨」の十一篇を本書に収めた。十六篇中、初出判明の詩は十四篇である。

2　体裁上の問題点

本書は明治四十三年に刊行した『相聞』（3月）『槲の葉』（7月）から五年ぶりの出版で、寛としては満を持して出したにもかかわらず、本文には体裁上いくつかの問題点がある。

一つは目次についてである。目次は奥付の前に二頁付されているが、その二頁目が本文二二六頁目に頁無しで再度刷り込まれている。二二五頁と二二七頁は本来続くべき内容の詩であり、これによって二二六頁は本書に存在しないことになる。従って本文の総頁数は二三四頁でなく、二三三頁となるところである。

二つ目は各作品に付されている作者が記した制作年次と実際の初出とにずれのある作品もあることである。これは作者の記憶違いか、思い込みかによるものか分からない。ずれのある歌を示すと、「自らを嗤ふ歌」は「（一九〇八―一九一一年作）」とあるが、二八八首中一九五首は、その初出が一九一一年から一九一二年、「駱駝」八首は

「(一九〇九年作)」とあるが、実は一九一〇年、一九一一年、「塩原の秋」二十五首は「(一九一〇年作)」になっているが、現在のところすべて初出は不明である。但し、一九一〇年(明43)の秋には塩原へ旅しているところから事実と符合する(三四〇頁参照)。「砂」十一首は「(一九〇七年作)」となっているが、一首だけが一九一〇年作で、他はみな初出不明である。「灰の底より」四十一首は「(一九一一年作)」となっている。そのうちの初出判明歌七首は確かにこの年次のものであるが、他は初出不明である。しかし「萩之家先生の例祭に」二十首と「冬と飢」十八首が「(一九一〇年作)」となっているのは初出通りである。

また詩にも制作年次と初出との間にずれのあるものがある。例えば、「誠之助の死」の「(一九一〇年作)」は一九一一年である。

しかし「小曲七篇」「雨」の「(一九一一年作)」、「黒き声」の「(一九〇九年作)」、「正月」「応接間」「煙草」の「(一九一〇年作)」、「冬のうしろ姿」「春の鳥」の「(一九一〇年作)」はいずれも初出通りである。

三つ目の問題点は集中に重複歌のあることである。全歌は四一一首だが、このうち四首は重複しているので、実際の歌数は四〇七首が正しい。重複歌を左にあげる。従って本稿ではこの四首に限って二通りの番号を個々に付している。

(53)・(54)　蠟石の四角の卓に肱つきてうすくらがりの秋風を聴く

(68)・(69)　土ぼこり黄いろに揚る風の日の乾ける畑に根葱の花咲く

(65)・(66)　世の中に思ふ男をたのまずて何を見上ぐる黒き上目ぞ

(68)・(69)　池に来て蘆の浮葉につまづきし風の脛見ゆしろきさざ波

このように一見杜撰(ずさん)な編集がなされた理由は明らかではないが、これまでの寛の詩歌集では時折見られることである。例えば『鉄幹子』と『紫』との重複歌でもある。これを二詩歌集それぞれの歌番号によって示す。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com